

1. はじめに: 日本文明と中華文明の違い
2. 中国思想の源流
 - (1) 中国における偽書論争
 - (2) 『避諱(ヒキ)』の文化: 儒教における嘘
 - (3) 中国の歴史は易姓革命の繰り返し
 - (4) 近代における泥沼の日中関係の実態は中国の長い歴史的線上に在り。
3. 中国の政戦略
4. 米国の対中戦略
5. 戦わずして勝つ智慧と力を備えた国創りに向けて(孫子で考える)
6. おわりに: 平和安全法制の整備で抑止力は高まる

1. はじめに

戦前から日中関係は“同文同種”や“一衣帯水”等の言葉が飛び交う関係の深さを強調する場合も少なくなかった。だが、ハンチントン(文明の衝突)によれば世界7大文明の中で、中華文明と日本文明はその内の独立した文明として扱われ、二つの4漢字から感じ取れるような密接さや親密さとは程遠い所謂『文明の衝突』という形を顕在してきたのではないだろうか。

神道を中心とした『多元的価値観』を受け入れる日本と、朱子学を中心とする陰陽二元の儒教が実は「敵か味方か」の『一元的価値観』の中国とが一衣帯水の地政学的位置を占めているのである。つまり、『曖昧な日本人・軸足が無いと見られがちな日本人・何を考えているか解らない日本人』という曖昧さと、『絆の強い日本人・桜花の如き潔さ・神風特攻の日本人』という団結すれば脅威となる両面として写る日本(日本人)、一方、『漢族中心主義・華夷秩序の世界観・我(民族・国家・親族等)中心』、『利己・現世利益・世俗的・先祖崇拜(血の一体性)・梅花の様なしつこさ』、『2000年不変・将来も不変』、普遍的価値は必ずしも普遍に非らず、更には『喧嘩両成敗は無い』という中国人とが、“似て非なる象徴”として“同文同種”が言われてきた時代が有るのである。これ等の、似て非なるものの源流をたどり、その延長線上における中国の現状を明らかにして我が国にとって如何なる対応が必要かについて孫子の思想を探り入れながら考えてみたい。

2. 中国思想の源流をたどる

(1) 中国における偽書論争

中国では上古から偽経・偽史という経書・史書捏造が為された。偽造・捏造は中国の伝統文化でもあった(黄文雄氏)。中国古来の*『四書五(六)経』は、既に漢の

時代(前漢:BC202~後漢:AC37~220)から**今文書経と古文書経の偽書論争**が有った様である。書経(古名は尚書)は政治史・政教を記した中国最古の歴史書とも言われ、堯・瞬(夏以前にあった神話に出てくる2帝)から夏(BC1900 頃)・殷(BC1500~1400)・周(BC1111~722)の帝王の言行録を整理した演説集であり、春秋時代の諸侯のものもあり、秦の穆公のものまで扱われていると言われるが、**現代中国も偽物天国**であり偽物でないのはペテン師だけと言われるほどの偽物天国(黄文雄氏)である。
*(論語・大学・中庸・孟子)(易経・書経・詩経・礼記・春秋・(楽経))

(2)『避諱(ヒキ)』の文化:**儒教における嘘**

「儒教の倫理的な核心は『忠、孝、礼、仁』であるが、**目上の者を諱(本名)で呼ぶのを避ける文化がある**。これが更に高じて、偉大な人物の為には醜い事を隠し、高尚な人物の為には過ちを隠し、親族の為には欠点を隠さなければならない」という、孔子が五経の一つ「春秋」を編纂した時の原則であると言われる。つまり、大中華の中国・小中華の韓国(朝鮮)では国家や家族にとって都合の悪い事や不名誉な事は隠すのが正義であり、**その為に嘘をつくのは倫理的に正しい行為**である。南京虐殺・戦争博物館・尖閣・歴史教科書等で歪めた歴史を押し付ける現在の中国や、日帝七奪・慰安婦問題・竹島・歴史教科書・自らの血を流さず他民族の血(日清・日露・朝鮮核戦争)により独立を果たした小中華韓国(朝鮮)に通じる価値観である。

(3)中国の歴史は易姓革命の繰り返し

ニューヨーク州立大学の唐徳剛教授は論文「転換パターン期」「ポスト啓蒙」において中国の歴史段階を、第1致段階は「*部族主義」の上古神話時代~夏殷周(春秋:BC550 頃・戦国時代:BC400 頃)までを、第2段階を秦の始皇帝時代から現在の中華人民共和国と区分している。*(五帝(黄・東・西・南・北帝))

ア. 中国の歴史的段階

(ア)第1段階は神話の時代から春秋戦国時代の部族主義に基づく封建制度の時代であり、『神の存在』をもって『秩序』を築いた西欧と異なり、特に春秋戦国の時代を通じて、混沌とした世界の中で自前の秩序を築き之を維持して行くために生み出したのが帝王という権力ではなかろうか。

(イ)第2段階は統一帝国建設のための『大一統』(封建専制支配体制)の時代であり、秦(BC221~206)の統一帝国建設により部族を基礎とした封建制度が崩壊し、高度の自由農業生産を基本とする経済制度、中央集権で高度な文官制度を根幹とする*政治制度を以て、王朝の興亡、英雄の交代、民族の離散融合、文明の栄枯衰勢、人口の大変動、生産の増減、商業の膨張縮小等の「数知れない変動」を繰り返した結果、漢(BC200 頃)・晋・隋(600 頃)・唐(700 頃)・宋(950 頃)・元(1250 頃)・明(1360 頃)・清(1630 頃)各帝国まではあたかも「**千年不変**」が定着しが、清朝末期の

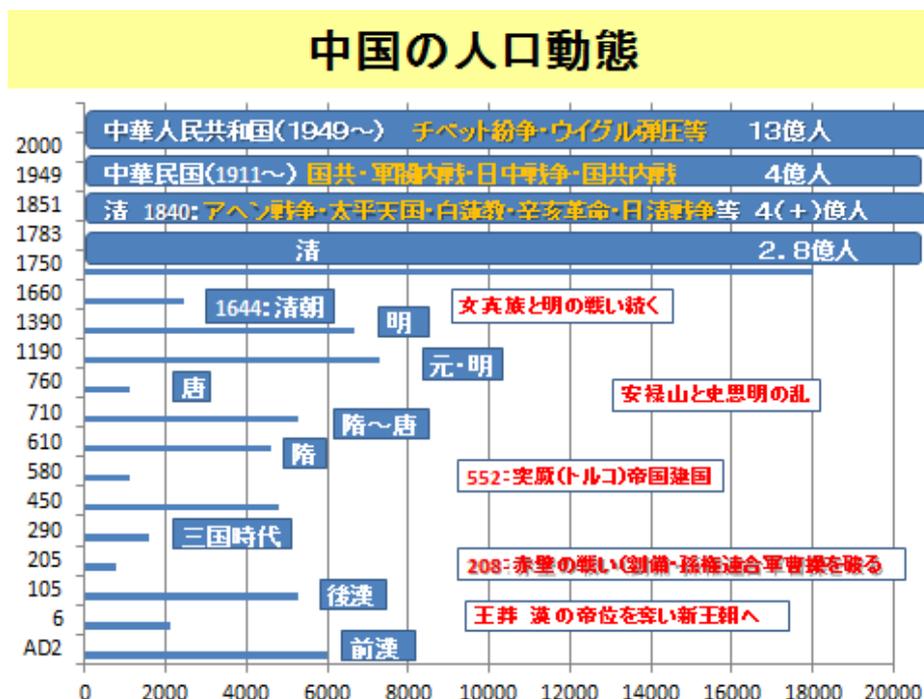
アヘン戦争以降は「**十年一変**」の様相を呈し、辛亥革命を経て中華民国(1910頃)における長い内戦状態を経て中華人民共和国(1949～)の現在に至っている。*(天に二つの太陽はなく民に二つの王はない)

イ. 中国の自然と社会崩壊の悪循環と**易姓革命**

秦帝国による統一以降は、人口過剰、食糧不足、自然収奪、旱魃・蝗害・水災・飢饉・病役・流民・虐殺、反乱・内訌・内戦、カオス(混沌)状態という中国の天下大乱の背景にある環境崩壊という**悪循環サイクルを繰り返した後易姓革命を起こし**新たな帝国が生まれては亡びると言う繰り返しの延長線上にあるのが現在の中国であろう。

ウ. 人口動向(漢書地理誌): 下表

人口の動態を大掴みできれば中国の盛衰を大観できる。秦・漢時代から明朝の時代までは、其の人口は6000万人(±)を頂点としながら激減期は約750万人まで減ってしまうという戦いの歴史を繰り返している事が解る。爆発的に人口が増えるのは清朝以降であり、内戦を繰り返す清朝末期から中華民国時代は約4億人である。中華人民共和国に入ってからは大躍進や文化大革命の時期を経ながらも着実に増え続け、2000年時点では13億を超えている。今や13億人を養うためには、国内の資源だけでは足りず、海外への資源漁りに余念のない状態であり、そのために周辺諸国や地球の裏側まで中華の害毒が溢れている。



エ. 文明背信の国勢を馴致(ジユチ)した中国(人)

昭和初期に発刊された「孫子の新研究」(阿多俊介 1930年・昭5)から当時の中国史観の一端が覗える。馴致(ジユチ)“馴染む”とか、“その様に移行して行

く”と言った様な意味だそうで、その一つには孫子の兵法に見られる“善く兵を用うる者は、役は再びは籍せず、糧は三度は載せず、用は国に取り、糧は敵に因る”（作戦篇） “* 重地では掠め”（九地篇、）は中国(人)の文明背信の国勢を表していると言うのである。更には“三千年來支那兵をして戦時の掠奪を当然の所得と信じては疑わしめざるに至り、為に平和なる支那国民は国内の絶え間なき動乱の為、一日として其の生命財産の安固を得たる事無く、為に此の世界最古の文明国も世界に類無き文明背信の国勢を馴致(ジュンチ)するに至りたるは、返す返すも、遺憾千万の次第というべきである。”と述べている。確かに特に日中戦争間の国民党軍はその様な行為を繰り返していた事は多くの資料から知られているところであるが、これを日本軍が行ったように宣伝する事も多々あった様である。（* 重地：敵の土地に深く入り込んで既に敵の城や村を沢山背後に有している土地(場所)

オ近現代の中国の変遷

(ア) 隆盛を誇る清朝(1644~1912)は18世紀半ば以降になると、ロシア・イスラム・モンゴルとの係争、19世紀半ばに入り白蓮教徒・太平天国等との内乱が続き、遂にはアヘン戦争を契機とした欧米帝国主義国の蹂躪を相次いで受けた。朝鮮半島を巡り日清戦争が生起し我が国の勝利となり、『眠れる獅子』の実態が暴露した。そして漢民族による辛亥革命によって清朝は倒れ中華民国が誕生した。

(イ) その中華民国(1912~1949年)も軍閥闘争を繰り返し、我が国が昭和の年号を改めた1926年も未だ各地に私兵を抱える軍閥が群雄割拠していた。この間の1919年に孫文が国民党を創設し、その後継者である蒋介石は各地の軍閥との戦いを繰り返しながら北伐により国内統一を目指した。毛沢東軍との国共内戦及び国共合作に次ぐ日中戦争(日米英ソによる代理戦争の様相)を経て我が国の敗戦以降蔣毛(国共)内戦に突入し、毛沢東軍の勝利となり1949年10月北京に中華人民共和国政府を樹立した。そして蒋介石政権は台湾に逃れ1971年まで国際連合の常任理事国を務めたが、中華人民共和国の国連加盟により常任理事国も入れ替わって現在に至る。

(ウ) 一方、中華人民共和国(1949~)は大躍進、文革という大失政を経て改革开放政策により農地の多くが工業生産や不動産業に転用され経済大国を達成し2000年には13億余の人口を抱えるに至り、農地を失った農業人口は都市の労働力と化した。その結果は、水系・大気・砂漠化をはじめとする自然の破壊が進み13億人を養う為には国外へ資源を求めなければ成らなくなった。90年代以降始まった中国の地球規模における資源漁りにはシーパワー(海軍力・根拠地・海運力)が不可欠である。又陸海シルクロード構想の実現と外資の必要上 AIIB を主導しなければならない状況に追い込まれてきたのが中国の現状であろう。国際的なルールを無視し、発展途上国や(ギリシャなどの)経済不振で悩む国々へ出向き大量の中国人と資金を送り込み、実質的な乗っ取りを図る(根拠地：帝国主義時代は植民地)。正に悪循環サ

イクルを繰り返した「易姓革命」と、重地では掠める「孫子」中国が見えて来る。

(4)近代における泥沼の日中関係の実態は中国の長い歴史的線上に在り。

所謂「泥沼の日中戦争」で代名詞化される日中関係対立の根源も又、中国の長い歴史線上的一幕であったと思う。つまり、19世紀に入り**帝国主義下のカオスと化した中国大陸**では清朝の崩壊・中華民国の成立と内戦へと突入した。一方、我が国は日露戦争で得た東北三省の権益を保護するために満州に軍を配置していたが、執拗なロシアの南下政策は東北三省のみならず朝鮮へも及ぼうとするものの当時の中国軍閥は東北三省への有効な対応は成らなかった。掛る状況下に我が国は安定した東北三省の経営に乗り出し満州国建国に寄与した。これにより満州国は繁栄しロシアの南下も阻止し得た。

だが中国では、第一次世界大戦に伴う中国のドイツ権益移譲を巡る対華条件等の不平等条約を巡り日本や欧米諸国を排撃する動きと共に、列強の支配に対する中国人のナショナリズムが高まった。加えて暴力革命を実現したソ連共産主義の影響も強く受け、その反発は一層過激ささえ増していった。その様な中で、中国の排日運動においては日本製品のボイコットや日本人襲撃などが激しくなった。

我が国は日露戦争で得た権益を保護するために昭和初期の満州(東北三州)には約1万人の陸軍が駐屯すると共に20万人以上の日本人が住んでいた。この権益と居留日本人保護に当たる日本軍は中国人によるテロや満州所在の軍閥との戦い(1931. 9:昭6満州事変)に突入し満州国(1932. 3:昭3)建設に協力した。軍閥による東北三省は満州国(最後の清朝皇帝である溥儀皇帝即位)として安定を取り戻し、産業も発達し人口も増えて行った。蒋介石によって形上は統一を図った様に見える軍閥対立の中華民国は一時の平穩期を迎えた。

当時の日本の立場はソ連の南下を阻止するために蒋介石政権と協同して「防共」をめざし協和努力に努めたが、中央政府や軍部の方針が必ずしも現地軍に明確に伝わらず、コミンテルンの暗闘に導かれた共産主義勢力(毛沢東軍)の巧みな工作によって遂に盧溝橋事件(1937. 7:昭13)が生起し、日蔣協和は実らず、更に上海まで飛び火した日中軍衝突は支那事変(1937. 7)として発展し、大東亜戦争終了の1945. 8迄戦いは続いた。この支那事変こそ“汪精衛政権(南京)と日本“ ”蒋介石政権(重慶)と米英仏“ ”毛沢東政権(延安)とソ連(コミンテルン)“と言った 正に「**三つ巴の日・米・ソ代理戦争**」であった。その後の国共内戦で毛沢東が勝利した結果、アジアに共産大国が誕生し、朝鮮半島は南北に分離し、東南アジアにはベトナムラオス等の共産国家が生まれたことを思えば、アメリカは20世紀前半に於いてアジアにおける主敵を誤ったとしか言えない。

3. 中国の政戦略

(1) 中華人民共和国政治指導部の特性

現在の中国指導部の特性を端的に言えば「儒教を抹殺した法家思想」に基づくものであり、“法律や刑罰で治め”、“富国強兵”、“君主専制の政策”がベースであり、“韓非子(性悪)”であり、“毛沢東思想+マキャベリー思想+孫子思想”を堅持していると言える。元来中国は歴史的に易姓革命政権であり、成上り者が権力を掌握するために、権力者は自ら天命を下し天子(皇帝)となる。現在で言えば中国共産党であり、更に18名の中央政治局員であり、更に突き詰めれば7名の政治局常務委員の中に占める総書記(習近平)である。現代中国建国の父とも言われる毛沢東は、経済的には失敗すべくして失敗したが、鄧小平は社会主義+資本主義へと舵を切り、**共産党の変身で乗り切った**ともいえる。つまり、「私営企業家を党へ取り込んだ結果市場経済とも矛盾しない」という矛盾を乗り越えて経済大国と成り、是を背景に軍事大国への道を突き進んでおり、国際舞台における役割が問われている。

その中国は地勢的にはロシアやインド等に囲まれた大陸国家であるが、ここ2-30年間における海洋への進出は目を見張るばかりであり、東シナ海・南シナ海等における振る舞いは、国際ルールなどお構いなしと言った“傍若無人”そのものである。とは言え、古来、遠交近攻・合従連衡の政治形態は引き継がれ、所謂“AUDIENCE (国際社会:第3のウォッチャー)の存在を無視できない状況に至っている。つまり、従来の敵か味方かだけではなく、+国際社会(国連を始めとする諸国際的な集団)を加えた国家の運営が不可欠になってきた。

(2) 中国指導部の政経戦略

世界第2位の経済大国へとの上り上がった中国は、経済力に裏付けられた軍事大国化の道をまっしぐらに歩んでいる。(2年近く前に、“後10年で GDP は17兆\$とアメリカの19兆\$にほぼ並ぶ”:精華大学現代国際関係研究院院長) 更に米国にも「新しい大国関係」を申し入れると共に、ロシアと手を組み後顧の憂いを無くして海洋へ進出しようとしている一方、上海協力機構を通じてユーラシアへの進出を試みている。シルクロード経済ベルト構想、貿易市場拡大、資源獲得、欧州までの物流ルート確保、テロ対策、ロシアとのユーラシア争奪戦への乗り出し等はその証左である。悪評高き資源を求めての世界各地へ進出は資金と労働力を併せて輸出し、支援を養笠にした乗っ取りというのが我が国との違いである。危機に瀕したギリシャ支援に乗り出そうとするのも、その一端である。又、海洋進出に当たっては、マハン流シーパワー戦略に基づき、商船隊・根拠地・海軍力を整えながら13億の民を養う体制を整えつつある。ギリシャの最大の港湾と言われ、欧州の関門とも言われる“ピレウス港”の開発整備に中国は乗り出そうとしている。これが成功すれば中国は欧州市場への“新シルクロード”構築が可能となり、中国海軍の欧州進出も容易になるだろう。インド洋に面した真珠の首飾り、南シナ海の岩礁埋め立て、北極海への進出、米国のパ

ナマ運河拡張への対抗策としての“ニカラグア運河による第2のパナマ運河構想、エボラ3国(中国人2万人)への支援等々は、正にマハン流のシーパワー戦略を地で行っているのである。又、中国主導の中露間の北京～モスクワ間高速鉄道大型プロジェクト、キルギス・トリキスタン・トルクメン・カザフスタン等の中央アジアへの経済浸透は中央アジアにおける主導権をロシアから奪い取り”一帯一路“構想を実現しようとしているのである。これ等は又、中国脅威論を以て周辺諸国への政治的譲歩・強要と言った中国の政治・経済・軍事戦略の一環であることを明記しなければならない。

(3) 中国指導部の軍事戦略

中国の軍事戦略は根底には“超限戦”を追求しているものと思われるが、陸上・海洋・航空・核・宇宙の各戦略に加え、対称と非対称戦を交えた軍事戦略を進めている。その中には手段としてのサイバー攻撃を各正面に導入して主として指揮・統制システムの無力化を狙っているものと思われる。

海洋戦略に於いては第一次列島線と第二次列島線及び海のシルクロード構築を実現しようと図っているものと思われる。第一次列島線内は『中国の海』として海空戦力と核戦力を統合した接近拒否戦略を採り、南シナ海を SLBM(10年後までに4～5隻保有:同前)の主要な基地とすると共に ASEAN の分断を図る。第二次列島線は中国の海を守るため各種戦力を統合した対米戦略として構成する。“空母は戦わずして相手を屈服させられる兵器である”として2025年頃まで数隻(10年後までに5隻建造:同前)を保有するであろう。南極は資源開発が禁止されているが北極は海洋法条約のみであり国際法の間隙をぬって進出している。

“宇宙は情報戦場の指揮所(10年後有人宇宙基地保有:同前)であり、宇宙衝撃と恐怖打撃の目標は、敵を思い留まらせることであり、敵を戦闘に誘発しないことである”として衛星破壊能力を備えた宇宙戦略を進めるだろう。引き続き、三種戦法(心理戦・メディア戦(宣伝戦)・法戦)及び絶対的優位にある手強い敵に対しては、敵の弱点に付込むために戦術を見付け攻撃を加える非対称戦(サイバー攻撃含む)を取り込むであろう。

然しながら、中国人民解放軍にも問題を多く抱えているのが実態である。例えばハード面はコピー主体であり、ソフト面は実戦経験伴わず、量的増強が主体であり質的にはコピーが多くを占めている。更には、これまで進めてきた政策は一人っ子兵士を生み、人事面で毛沢東派と改革派との確執が有ると言う弱点も内在している。加えて、中国社会の実態例として、国内統計を信じない李国強首相や新幹線事故の原因は自国開発の車両連結部の不良というのが実情であり、中国人民解放軍内にも同様の問題が潜在する事は十分推測できる。

(4) 中国の「戦略的辺疆論」

1987年に徐光裕少将は軍の機関紙で「**戦略的辺疆論**」を発表した。“中華帝国を守る為には中華(中央)から遠く離れた**辺疆(地域)**を中国の傘下に置き外敵から中華を守る”という**伝統的な国防上の考え**である。つまり、**国家力に比例して**辺疆を傘下に入れる****というものであり、これは 何も陸地だけに限るものではない。中国が対米戦略上描いている第1列島線、第2列島線の構想は正に「**戦略的辺疆論**」を適用している。東シナ海は第一列島線確保に必要であり、南シナ海は SLBM による核の第2撃力維持上不可欠である。尖閣はもとより琉球まで領有を主張し、我が国周辺海域の調査活動などはこれを裏付けている。2050年の領土目標地図も決して空想などではない。

《ネット世界で出回っている「2050年の中国マップ」》



尖閣三段階持久戦略

毛沢東の無言
↓
鄧小平の棚上げ論
↓
習近平の核心的利益主張
↓
占領

かつてナチスドイツは“**絶対的生活圏の確保は国家の権利**”と主張し『**国力は国境を決する**』と述べている。中国も“13億の民を養う排他的経済水域確保は国家の権利”とでも言いかねない正に『**国力は EEZ を決定する**』という思想の持ち主である。つまり、長期的時間軸と短期的な時間軸の視点で情勢は判断して行かなければならない。尖閣列島周辺では海警の動きが不法行動を繰り返しているが、グレーゾーンとして我が方が手を抜くと直ちに占拠し既成事実化するであろう。

『四夷(東夷・西戎・南蛮・北狄)』を凌駕する漢族中心主義的観念こそ中華思想であり、秦朝・漢朝の『**大一統**』後には揺るぎ無きものとなった**大中華の中国**である。この影響を強く受け続けたのが小中華の朝鮮半島である事を強く銘記すべきだ。

(5) 習近平体制の特性

習近平は2012年秋、」党政軍の三権(総書記・国家主席・中央軍事委員会主席)を握った。任期は1期5年、2期10年であり定年は68歳である。中国共産党の中央の中央とでもいう中央政治局委員会の18名の実態は習近平にとって弱点あり、補強に懸命である。つまり、胡錦濤前総書記や李克強首相は共青团出身で政治家としての名実ともに実力派であり、鄧小平のお墨付きが有るが、習近平は太子党二世に

過ぎない政権内の少数派である。しかも定年年齢である68歳未満の者も習近平の側近には少ない。習近平は「老子」流では3～4流の指導者であるのかも知れない。“大上は下之有るを知るのみ(一流)。其の次は親しんで之を誉む(二流)。其の次は之を畏る(三流)。其の次は之を侮る”(四流)。:老子第17章より。

習近平は国民のナショナリズムにアピールするため「**偉大なる中華帝国の再興**」を掲げ、毛沢東を信奉し『第2の文革』をやりかねない。しかも南シナ海の岩礁埋め立てなどは、“**版図**”(を拡げ)による中華を支配し・屈辱を晴らす”という大衆受けを狙っているとしか思えない。又、一党独裁を堅持し外資たたきを行いながらも外資は流出し、経済成長は鈍化し、所得格差の拡大により民衆の不満は爆発の恐れを孕んでいる。この為に暗殺の危機すら噂され、外出時は120名の警備官を引き連れているとも言われる。更には少数民族の反発やテロ対策、中間層以上の民主化要求の熾り、ITによる情報統制の困難性等に遭遇している。

掛る状況下で習近平には**2つの強硬派**が存在すると思われる。軍内部と国民力である。最近の汚職撲滅運動は軍の元中央軍事委員会のメンバーから元政治局常務委員までかなりの高官まで進められた。中国では“汚職は国を滅ぼす・汚職の摘発は党を滅ぼす”とまで言われている様であり、結局は習近平派には全く及んでいない事を考えれば、権力闘争の一環と考えることができる。又、鄧小平のお墨付きも無く、軍の中に地盤を置く習近平は正に**軍の独走**を許して(黙認?)いるように見えてならない。我が自衛艦に対して行ったレーダー照射事件は外務省には知らされず、対外展開などは軍主導で行われ、外務省は相手にされてはいない。最近ではJ11機の米軍機異常接近などもあった。だが、軍内部も決して一枚岩であるわけでは無く、権力闘争に使われている汚職摘発は軍内部の対立を招きかねない。習近平派と対立する軍内改革派と国民の不満や常識派が結びつきも習政権には危険要素であろう。

中国経済は消費が小さく輸出と投資で成り立つが、共にスローダウンの状況にあり、李克強首相は「新常态ニューノーマル」政策を打ち出し 従来の8%成長を6.5%に修正したが、これでは国内の雇用を満たすことは出来ないだろう。**AIIB** は中国主導による**「資金集め**」と**「中国の過剰資材・人材のはけ口**」としてインフラ輸出を図る戦略にある。中国は唯一の拒否権を有し、欧州は狭く閉じ込められている。現在の所7カ国は調印していないが、**日本**は参加するには不透明事項が明らかに成った時点で賛否を決めればよいと思う。世界第2位の経済大国・新型大国関係・核心的利益を主張しながら自らを**「開発途上国**」と位置付け、ODAが欲しい(在日中国大使談)と語るのも中国流の詭弁である。キューバの米国接近は中国にとって痛手であろう。頼りはパキスタンのみとも言われ、BRICs銀行設立が響いたとも言われる。

中国の韓国接近は北朝鮮崩壊後の韓国による半島統一への手当てであり、統一後、**米軍の北上を阻止**が狙いであり、日韓対立を利用した中韓での壮大なアジアつくりであり**韓国の中国の属国化**である。**因みに韓国では、古い世代は統一に賛**

成であり、新世代は反対が多いのが実態である。

(6) 中国で起きている具体的事象

ア. 世界的規模で生起している事象としては、資源漁りと嫌われ者の中国人の氾濫である。南シナ海岩礁の埋め立ては国際的ルールを無視した自己主張の強行であり周辺諸国への脅威ともなっている。孔子学院の創設は中国語による侵略行為が続いていたが、最近では創設左記の国々からの反対が起きて行き詰まり状態が顕在化してきている。相変わらずチャイタウンは拡大の一途にあるが、特にアフリカ・欧州では顕著である。海軍・宇宙・核等を中心とした軍事力拡大は止まっていない。中国発と見られるサイバー攻撃が散発しており、政治・軍事・経済・社会との分野で障害が生じている。イスラム国への中国人参加も見られ、対米対決姿勢は明白であり、WWⅡ終戦70周年を期した対日歴史戦等を挑んでいる。

イ. 中国国内では、胡錦濤政権の10年は「格差社会の数倍増」「国民暴動倍増」に終り、是を引き継いだ習近平政権は高度経済成長速度の減退・低迷・バブル弾けの徴候を呈している。政治改革進まず、利権構造の拡大強化と汚職・腐敗の氾濫と此れの撲滅運動は習・李対立の権力闘争の様相を呈している。

毛沢東回帰を思わせる**思想・精神の引き締め**強化が進み、正に第二の文革をも思わせる『悲鳴』とも見える。**少数民族問題先鋭化**は年々激化し、治安維持費は国防費を凌駕している。自然・水・食物等の**環境劣化**は年々激しく、富や人財は**海外に流出**し、要人の身に付けた物をアップで撮影などを禁じたメディアによる写真撮影「10のべからず集」が常識化して久しい。そして遂には**大学思想教育**において西側に価値観を伝搬させる様なテキストは使用が禁止された。

ウ. 日中間では、中国漁船の我が巡視船への衝突や度重なる領海領空侵犯、海上自衛隊艦艇のレーダー照射事件やサイバー攻撃等の他、**歴史戦争**への挑発や無節操な我が国の土地・森林・水源地等の取得・珊瑚を始めとする資源荒らし、形だけの日中首脳会談に始まったが最近では政府レベルでの各方面での話し合いが再開しつつある。対日報道に於いても全否定から部分否定へ変化:もみられる。

エ. シナリオ

中国の台頭は明らかであるが、将来の中国の姿を描くチャナウォッチャー達は少なくない。①一党独裁で繁栄する**強大なシンガポール化**から ②労働人口減・経済成長スローダウン下の一党独裁制維持しながら**現状で推移**する。③中間層以上が我慢できず**民主化へ進む姿**、或いは、④**管理された段階的民主化へ進む姿**、最も厳しいのは、⑤**軍民結合・クーデターにより一党独裁制の崩壊**という姿を描くアナリストがあるが、日本の中国分析は大半が間違ってきたとも言われる程極めて難しいのが現在の中国ではなかろうか。

4. 米国の対中戦略

(1) 中国の秘密戦略: 100年マラソン

中国主導の国際秩序を築く中国の長期戦略(マイケル・ヒルズ・ペリー: 2015. 2. 3)に依れば、中国指導部は米国の主導と関与の誘いに従うふりをしながら、国力を強めて**米国の覇権を奪う**。又、「現在の日本は戦前の軍国主義の復活を真剣に意図する危険な存在である」とする「**日本悪魔化**」工作を実行してきた。アジアと日本国内をも対象とするこの反日工作は、* 日本が米国の主要な同盟国として安保と経済の大きな柱である**現状を突き離す事を目的**とする。* 中国の日本糾弾もその路線に含まれる。①対中関与は協力をもたらす。②中国は民主主義へと向かっている。③中国は米国の様になりたいと願っている。という年来米国側の3つの「**対中想定は錯誤であった**」と述べている。

(2) 世界はこう動く (ズビグネフ・ブレジンスキー)(カーター政権安保補佐官)

同氏の「21世紀の地政戦略」に依れば、* 21世紀の世界政治の舞台はユーラシアである。* ユーラシアは4地域に区分される。即ち、①欧州(ドイツ) ②ロシア ③南部(インド・イスラエル・イラン等) ④極東(中国)と述べている。そして、『**米国はこの地域の大国を抑えれば世界の覇権を維持できる**』というのである。

(3) 米国の対中戦略

G2では中国があまり動かずアメリカは失望した。オバマ大統領は超大国の大統領としての職を全うしていると言えるのだろうか。インテリ過ぎるのではないかとも思われ、中東でも北部アフリカでもアジアでも重大な決心が出来ていない。世界の警察を放棄したアメリカには“付け入る隙”が生まれ、世界の各地でタガが緩んだ。アジアに於いては「リバランス戦略」により台頭する中国に対応しようとしているが、相対的な国力の低下を来したアメリカは関係諸国の協力が欠かせない。然しながら、アメリカは今後とも、人民元切り上げ要求、人権問題、法の支配、中国の南シナ海 埋め立て批判、対インド原子力協定、ロシアとの新 START、TPP では対中狙い撃ちにも期待を込めているだろうが、これまでは余り効果は期待できない結果と成っている。とは言いながら、軍事力でも外資力でも中国の比ではないし、これが中国の弱点でもある。しかもアメリカは決して NO2を許さない国であり、米海軍の世界の海支配で米中の鬭ぎ合いは有るだろうが、米中の直接軍事衝突は双方とも回避に努力するであろう。だが**米国がどこまで我慢できるかも**大きな鍵となるのではないかと思料する。つまり、中国に誤解を与えない事と同時に、アメリカに誤解を与えない事も重要であろう。これからの日本の役割は大きい。

朝鮮半島では、南北統一後の核兵器保有は、米中共にこれを許容せず、パナマ運河拡張を目指すアメリカとニカラグア大運河による第二のパナマ運河を目指す

米中の確執も続くのではないだろうか。

6. 戦わずして勝つ智慧と力を備えた国創りに向けて孫子で考える

(1) 平和ボケ日本の現状

長年続く平和ボケから脱却するには、**正しい戦略環境変化の認識**が不可欠である。即ち、中国の台頭は明らかであり、米国の超大国の力は相対的に低下し、**アジアのパワーバランスはアヘン戦争後約2世紀ぶりに激変する**と共に、北朝鮮の核・ミサイルの技術が向上したこと。これに伴い、我が国の外交・防衛は中国の膨張主義や北朝鮮の軍事大国化を阻止する国家戦略抜きには考えられなくなった事を強く認識すべきである。だが、**我が国内の状況**は、大東亜戦争後の連合国の自己正当史観（太平洋戦争史観：日本悪玉論他）が、我が国の（戦後の）「現代神話」と成って現在に至っている。共産主義者や左翼、及び保守リベラルの大多数が、更に自称保守派の中にも多くの「現代神話」の信奉者が実在するのが実情である。

その様な実態が、平和安全保障法制議論に於いては「国民のリスク」を語るべきところを「自衛官のリスク」にすり替える政治家達。国民も観念論・情緒論・神学論に毒されている。更には「戦争抑止の国創り」を「戦争が出来る国創り」にすり替える野党。先の戦争後「平和を享受してきた」歴史的事実を無視した旧態依然の「巻き込まれ論」を持ち出す野党と「現代神話」の信奉者達、等々国際環境の変化などは全く関係なく観念論に終始している。



(2) 「兵とは詭道なり」

凡そ 2500 年前に孫子は、「兵は詭道なり」と始計篇で述べた。兵とは戦いか戦争を指すが、故に * 能なるも不能に示し * 用なるも不用を示し * 近くともこれを遠きに示し遠くともこれを近きに示し * 利にしてこれを誘い、 * 乱にしてこれ

を取り* 実にしてこれに備え、* 強にしてこれ避け* 怒にしてこれを撓し、* 卑にしてこれを驕らせ* 佚にしてこれを勞し、* 親にしてこれを離す。* 其の無備を攻め、其の不意に出ず。此れ兵家の勢、先には伝うべからざるなり(状況に対応して処置するのであるから予め先に伝えることは出来ない)。と述べている。元来孫子の本質は、戦わずして勝つことを最善としており、非戦主義が最も優先される。然し、已む無く戦わざるを得ない場合には、詭道が極めて重要になるのであるが、平時からの戦い(外交・防衛等)に於いても当然詭道が行われるのである。

(3) 中国詭道の現状

現在の中国の詭道の例について幾つか挙げたいと思う。「**中国は覇権や拡張を求めない**」と主張するが、岩礁に軍事基地を建設する。最近の国防白書では「**軍事抗争への準備**」という帝国主義への引き込みを主張する。「**宇宙の武装化と軍備競争に反対**」と主張する一方では、衛星破壊実験で宇宙ゴミをまき散らす。「**核軍拡競争には加わらない**」と主張しながら、核兵器保有国の中で唯一核軍拡を行っている。

尖閣には毛沢東は触れず、鄧小平棚上げし習近平は核心的利益を主張する。その次は占領するのだろうか。東シナ海・南シナ海の大半を領海と主張し、力による現状変更を強行するのは正に**戦略的辺境論**に基づく中華思想の現われである。又、世界第2位の経済大国と言う一方では、「中国は**世界最大の発展途上国**であり **ODAが必要**」という詭弁を弄する中国大使(駐日)まで出てきた。

(4) 先ずは戦わずして勝つ (孫子に見る不戦屈敵と用戦屈敵)

孫子は(始計篇で)「未だ戦わずして廟算して勝つ者は、算多ければなり。未だ戦わず**廟算**して勝たざる者は算得ること少なければなり」と平素から国力をバランス良く整備して置く事の重要性を説くと共に**外交・詭道**について述べている。又、(九變篇で)「用兵の法は、其の来たらざるを待むこと無く、吾の以て待つ有ることを待むなり」と**備えて待て**と言う。憲法九条が有れば敵は攻めて来ない等とは決して言わない。だが、(謀攻篇では)「百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。**戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり**」。そのために「**上兵は謀を伐つ。その次ぎは交を伐つ。その次ぎは兵を伐つ。其の下に城を伐つ**」。**不戦屈敵と止むを得ず用戦屈敵**を述べるが、兵を撃つのは次々等である。更に(作戰篇では)「兵は拙速なるを聴くも、未だ巧久を賭ざるなり)(長期戦の戒め)(7分勝ち)を強調する。

(用間篇では)「相守ること数年にして、以て一日の勝を争う。而るに爵禄百金を惜しんで敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の將に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主_にに非ざるなり」と、**百年兵を養う意味と情報の重要性**を述べている。(火攻篇では)「利(理)に合えば而ち動き、利(理)に合わざれば而ち止まる」と**軽々に軍を動かすな**と戒めている。

不戦屈敵、短期における用戦屈敵を実現するために必要な、限りなき奇を出せる**人材の育成**について(勢・虚実篇)「戦いは**正を以て合い、奇を以て勝つ**。善く戦う者は、人を致して人に致されず」と強調するが、正は正々堂々、例えば防衛法制や防衛力をしっかり整える事は正である。奇は正を以て当たった後の新たな状況に**適応**していく事である。其の奇こそ新の状況に置ける正となり、状況の変化に応じて正と奇は繰り返されて勝利まで続く。人を致すとは主導権を握る事である。正に人創りは無限に続く状況の変化に適応する事を目標にしており永遠の過大であり目標であることを述べている。つまり、人創りの目標は、連続不断に変化する状況下で勝利を獲得するまで「**正奇・詭道・虚実**」を出し得る**人材**を作る事である。

(5) 戦って勝つための孫子

兵は拙速なるを聴くも、未だ巧久を賭ざる。(作戰篇)と**用兵屈敵は短期決戦で臨め**と強調する。「**勝利の五条件**」として ①戦うべきか戦わざるべきかを知る。②衆寡の用を知る。③上下の欲を同じくする。④虞を以て不虞を待つ。⑤将能にして君御せざる。(謀攻篇)を掲げ、「勝兵は先ず勝ちて而る後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いて而る後に勝を求む」と**勝ち易きに勝て**(形篇)という。戦いに臨んでは戦場の大きさを計り必要な兵站及び兵力数を決めて彼我の比較で勝敗を見積もった後に勝利を獲得せよと「地は度(夕)を生じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝を生ず」。地・度・量・数・称・勝(形篇)の手順を踏めと言う。又、「凡そ戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ。戦勢は奇正に過ぎざるも、奇正の変は勝げて窮むべからざるなり。奇正の相い出ずることは、循環の端が無きが如し。執れか能くこれを窮めんや」と**極み無き奇正の変**(勢篇)を以て勝てと言う。「卒然とは常山の蛇なり。その首を撃てば則ち尾至り、其の尾を撃てば則ち首至り、其の中を撃てば則ち首尾至る」。(九地篇)と述べ、部隊は**常山の蛇“卒然”の如きであれ**と説く。前項でも述べた様に「爵禄百金を惜しんで敵の情を知らざる者は、成功の衆に出ずる所以の者は、先知なり。先知なる者は鬼神に取るべからず、事にべからず。度に験すべからず。必ず人に取りて敵の情を知る者なり」(用間篇)と**情報活動にケチるな**と強調する。これにより「彼を知りて己を知れば、勝乃ち殆うからず。地を知りて天を知れば、勝乃ち全うすべし」(地形篇)と**彼・我・地・天を知れ**は余りにも知られている。所謂、任務・敵・我・地形・時制を知れという事である。

7. おわりに 「防衛法制を整えて抑止力を高めよう」

日中関係・日韓関係は国交回復後最悪の状況にあると言っても過言ではない。これは日本文明と中華文明との文明の衝突の一端と見てもこれまた過言では無からう。中華文明には**偽造・捏造と言った伝統文化**があり、儒教における嘘ともいえる『**避諱(ヒキ)**』の文化を観てきた。そして2000年以上に亘る**易姓革命の繰り返し**という中国

の歴史を概観した。**中華文明**は人口過剰、食糧不足、自然収奪、飢饉、流民、虐殺、反乱、内訌、内戦という中国の天下大乱の背景にある環境崩壊という**悪循環サイクル**を繰り返しの歴史から生まれ“捏造や虚偽”、“虐殺や内訌”“溺れる犬は叩き”、強きには靡き“**“重地では掠め”**”、“詭道に長けた”価値観を生み出した。

一方我が国は、万世一系の天皇制を堅持する長い歴史を有し易姓革命とはある意味で真逆の位置にあると言っても過言では無かろう。中国大陸に接する朝鮮半島も小中華とも言われる中華文明に強く影響を受けて今日に至っている。これらの価値観の相違は容易に乗り越えることは出来ないだろう。例えば、歴史に関する共同研究して、その**違いを認め合う**ことにより国際関係の安定化の端緒を求めようとする試みには役立つだろうが、肌の色が一緒であり、同文同種であり、一衣帯水の近い関係にあると感じても、価値観は根底から異なる事を銘記して付き合わざるを得ないだろう。外交で熱戦を抑止出来るほど『甘くない』という事を胆に据えて置かなければ国民は守れない事も知るべきだが、「自らの国は自ら守る」国民の気概が先決だ。

従って、国力国情に沿った**防衛力の整備**は勿論であるが、折角整えた防衛力を状況に応じて柔軟に運用出来る体制でなければ防衛力は生かされず、『**戦わずして敗れる**』という本末転倒の防衛力整備に陥ってしまう。国会で議論が行われている『**平和安全法制**』は現在置かれた状況下では一刻も早く整えなければならない**必要最小限のレベルの法制**である。元来、防衛法制は最高の国家の危機管理法制であり、これまでの様な或いは現在も議論されている様な**「ポジティブリスト体系**」では、予測も着か無い様なあらゆる状況の変化に対応するには適さないものであり、又、**専守防衛という理念**も又飽く迄も政治用語であり、国家存亡の機に及んでは戦理上成り立たない理念であることは明らかである。だが現場では如何なる状況にでも即応できる態勢は維持しなければならない。その為にも現場は常にポジティブな態勢を求められるだろう。抑止力を高め、戦わずして勝つためにも法制の整備(**ネガティブリスト体系**)は不可欠である。現在の議論が観念論的・情緒的・神学論的に陥っているのはポジティブリストでの議論に起因するのだが、段階的でも現状打破は急務だ。

尖閣を含む南西諸島は正に『**重地**』である。「国民のリスク」を「自衛官のリスク」にすり替えて論じる政治家達は、自衛官の崇高な使命感に泥を塗っているのに気付いているだろうか。ならば自衛官のリスク軽減や抑止力向上のためにも法制を整えて欲しい。この様な政治家達や所謂物解りの良い国民では、国も護れないどころか歴史戦にも立ち向かえないだろう。歴史戦は武力を伴わない戦争でもあり、これには専守防衛などあり得ない。嘘を平気で言い、それを道理とする中華文明圏の人達と交わるには、国民一人一人の「心の楯と鋒」が基盤に無ければならないし、公共の福祉に反する行為や思想は憲法の理念にも沿わない事をもっと知るべきである。最高の公共の福祉は国家の抑止力を高める事である。張子の虎では無く、自らの対処力や同盟力を高めるためにも一にも早い平和安全法制の制定が急がれる。 おわり。